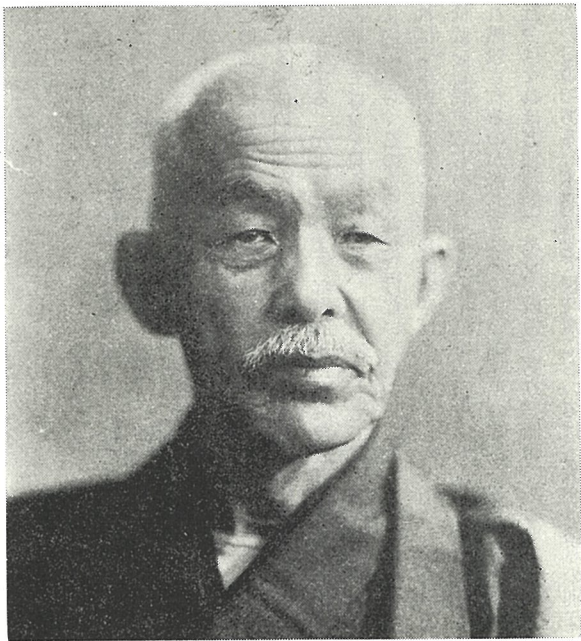




同志社人物誌 (20)

# 波多野培根

加藤延雄

波多野培根にはまだ伝記がない。彼は私の恩師である。ぜひ彼を研究してみたいが、短期間にはできないので、ここではその経歴の大略にわれら弟子たちの記憶や印象等を織りまぜて略伝にもならない紹介文を書

いてみた。

—

波多野培根<sup>まきね</sup>は、明治元年六月二十日、島根県西境の山里、津和野町に生れた。彼は君命

により勝山城を死守、陶晴賢軍と奮戦、名譽の戦死をとげた勇士波多野<sup>しげのぶ</sup>滋信の十二代の孫である。ここから彼は勝山を号とした。父は藩学養老館塾頭藩士波多野<sup>みよめ</sup>達枝、培根は長男弟習農は若くして歿した。明治八年<sup>一八七五</sup>一月津和野広小路小学校入学、十三年十二月卒業。その後、家で父から漢学を学んだが父の死（明治十五年）後母の手一つで育った。母はいかにも武士の母、武士の妻らしいしつかりしたしかも上品な婦人であった。同志社の教頭波多野も時にはこの母からたしなめられたという。明治十六年<sup>一八八三</sup>九月十六才の時、志を立てて岩国の沢瀉塾の陽明学者東崇一についた（十八年三月まで在塾）。

明治十八年<sup>一八八五</sup>九月同志社普通学校に入学した（培根の従兄伝道者、増野悦興の紹介によると察する）。十九年六月二十日ラーネッド博士から三輪源造、久永機四郎、加藤延年と共に受洗、爾後、忠実篤信な基督者として一生を貫いた。彼は全校の信望を得た。新島も特に彼に期待した。次の新島書簡は、その証である。

『我が学校ならびに教会の前途につき心中大に憂ふる所あり候間一応貴君に御面談申

度候間御都合被下今午後四時より五時の間に御来訪被下度候尤其時間には多分裏庭にて射的をなしおり候間直ちに裏庭の方へ御回わり被下度候小生は御存じの通同志社より無残にも書生に面会する事を禁止せられ候間せめては僅々の人に逢ひ学校の将来をも御托し置き申度候間貴君の御光来は他人には内密となしおき被下度右得貴意。

(明治二十一年一月一日附)

明治二十三年<sup>一八九〇</sup>六月同志社普通学校卒業、同志社予備校と普通学校の教員となり、数学を教えた。二十五年六月大に感ずる所があり、伝道を志し、強いて同志社を辞し、山形県酒田に一年四ヵ月、宮城県涌谷に六ヵ月、同白川に七ヵ月、仙台に一年十ヵ月伝道した(転々と移動したのは伝道会社の命による)。この間二十八年三月丸山貞と結婚(堀貞一牧師司式)したが夫人は三十一年十一月二十五日永眠した。二十九年十二月伝道界を退き、翌年四月仙台尚綱女学校の授業補助となったが、翌三十一年三月函館中学校に転じた。明治三十四年三月藤田貞子と結婚、翌年畝傍中学校に転じたが、明治三十七年<sup>一九〇四</sup>母校同志社の熱心な懇請に応じ、九月同志社普通学校に転じた。

## 二

同志社は新島の永眠、徴兵猶予除外、米国外伝道協会との不和、同志社通則変更とこれに対する校友の大反響等悪原因の集積で衰微を極め、生徒数も二十二年頃普通校七〇〇であったのが三十三年には僅か一五〇となった。しかしこの頃から校友の愛校心がたかまり、教師経験ある有志が母校にかけつけ、薄給に甘んじ、同志を糾合、スクラムを組んでこの頽勢を押し返えそうと懸命の努力をはじめた。徴兵猶予問題や米国外伝道協会との問題も条約改訂という国際問題とからみ、同志社に有利に解決するに至った。明治三十四年頃から復興し始めたが、いっそう復興を進めるため、強いリーダーを迎えることを教員会議はきめ、その候補として波多野の名が出た。教頭中瀬古が招聘の交渉をしたが、慎重な波多野は難局に当る覚悟が固まるまで確答はさけた。しかし彼もついに恩師新島の信頼依託に応えて立った。彼は三十七年<sup>一九〇四</sup>九月同志社普通学校に転動。翌年九月には教頭となった。当時の同志社の制度では社長が各々々長を兼ね、その実務は教頭が執り、実質上の

校長は教頭であった。

波多野着任の頃の同志社は復興途上で普通校生は三六〇に過ぎず、私が入学した三十九年<sup>一九〇六</sup>によやく四五〇に達したが、なお朝の礼拝には神学生や専門校生と共に全部礼拝堂に入っていた。しかし四十二年頃から普通校生<sup>五七〇名</sup>だけで礼拝堂を使用した。普通校生急増のためである。波多野と教師たちの強い団結と信頼そして献身的努力の効果は段々とあがってきた。彼はもちろん同志社の伝統的精神である基督教主義を強く明瞭に打ち出し、よい礼拝を行うことを心がけ、先ず礼拝出席と静粛に重点をおいた。彼は祈禱中でも態度不良者に注意を与え、甚しい者は退堂させた。礼拝説教の内容にも心を配った。かつて日曜の礼拝説教で年少者にはどうかと思うようなことを言った芦田教授に説教最中に抗議する彼を見て驚いたことがある。しかしある朝、礼拝後、彼が時々やることだが生徒に注意を与え、それがくどく続き授業時間に大分くいこんだ。たまりかねた一上級生は前に進み出て、こんなに授業時間を潰しては、と抗議した。波多野は急いで話に結論をつけて切り上げ、出しゃばった生徒を叱ることもなく、道理に

は従う態度を見せた。

彼は規律をひきしめ賞罰を明らかにした。

私の組の卒業のお別れパーティーに酒が出た。主謀者と飲酒甚しい者を卒業式前に退校させた。制服を勵行し、特に下駄ばきを禁じた。一同級生が下駄で教室に入り波多野にみつかる前に逃げたが、残ったわれらが、生徒同士でいましめ合うべきだとひどく叱られた。互に相いましめる自治の風を作ったのであろう。優良教師、特に同志社出身、基督者の優秀教師を得ようと努力した。彼は教師たちの研鑽を奨めた。そのため教師の難務を軽減し、自分がそれを引受けた。そして多忙中にも英独仏ラテン等の外国語をマスターし、歴史、思想、哲学、宗教方面の原書を読んだ。彼が終生精進し、学び、進歩したことは感心である。とにかく彼は同志社を日本一の学校にしなければと意気込んでいた。恩師、母校、祖国、神と救主に対する熱意からの決心であらう。左の詩はよくこれを示していると思う。

師恩海嶽以何酬 碌々徒悲歲月流  
黽勉須磨魂一片 神光未普照皇州

追憶新島先師 二三用先師之句 昭和庚辰初春

### 三

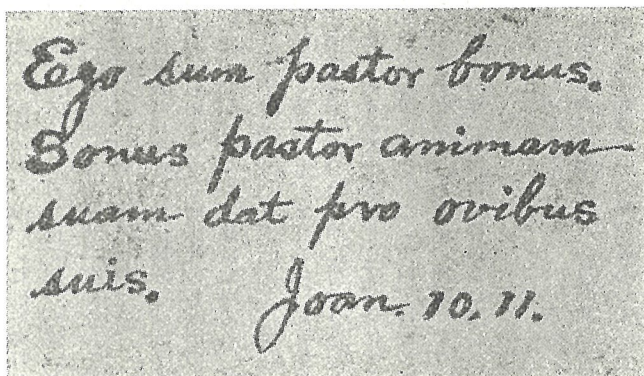
彼は教師たちに生徒のよき指導者たらんとを求めた。私は、彼が同志社を去った翌年母校によび戻されたが、数年もたった頃、ふと教員室の扉に貼つてある名刷大の紙が目に入った。波多野の筆跡で *Ego sum Pastor Bonus Pastor Bonus animum suam dat pro-vibus* とある「私はよい羊飼である。よい羊飼は羊のために命を捨てて」(ヨハネ福音書十章十一節) 命がけの教育は彼の覚悟であり、教師への要望であつたと知った。

彼は剛健な氣風を奨励した。スポーツ特に相撲や旗奪を好み、運動会を奨励した。兵式体操野外演習も好んで參觀した。私はある時将来の方針を相談すると、軍人になつては、と言われたことがある。しかし彼は決して戦争主義者、侵略主義者ではなかつた。義戦は認めたが、侵略は排斥した。明治四十三年八月韓国合併の報を見て一合併主張者に送つた合併反対の書簡(写し)を見れば彼の戦争観歴史観を伺い得ると共に、彼が将来の日本を予見していたことを知ることができよう。よい軍人は尊敬した。大山元師国葬の際の彼の

訓話の草稿は、いかにこの武人を高く評価したかを示している。同志社体育顧問、山県万吉大佐は彼の信頼を受けたが、山県も彼を尊敬し、もし彼が軍人なら将官級の器であると言ひ。あるいは波多野が授洗してくれるなら基督者になろうと言つた。

波多野は毎朝七時半の礼拝に出席して、終日校務をみ、誰よりも遅く退出したが、退出前に校舎内を一巡して落書を消したり、机列を正したりするのが常であつた。休憩時間中にさえ執務するので授業時間には遅刻がちであつた。

彼は西洋史を教えた。私は三年級でパールの万国史抄(英文)をならい、西洋史に興味を覚えた。彼は四、五年級で検定教科書を教えた。彼は黒板一ぱいに細字で板書して生徒に写させた。教科書とは歴史観がちがうので、筆記で補充修正せざるを得なかつたのである。彼の史観は道德批判的であり、大義名分を本とする儒教の考え方を越えて永遠の原理神の義を反映するものにまで拡大し、歴史には神の摂理が大きく働くと考えた。すなわち彼の精神史観の究極はこの「摂理史観」に結びつくものであつた。われらが彼の歴史講



中学校の教員室扉に貼られていたヨハネ伝の一節

義から受けた印象は歴史には正義と神の導きとさばきがあるということであった。彼の私宅を訪う学生に対しても、この史観から多くの史実を批判しつつ、日本の将来、同志社の責務を時のたつのも正座でしびれる若者の足

も忘れて説き続けるのであった。

彼はまた宗教活動にも力を尽した。朝の礼拝にも時々説教し、聖日には必ず教会に出て日曜学校で普通校生を教えた。私も彼のコリント書講義を聞いたことがある。

#### 四

彼は同志社の生命はキリスト教々にありとし、ここに学校運営、生徒指導の重点をおいた。儒者としてスタートした彼は儒教を高く評価しつつも、儒教道徳をもって基督教道徳の前段階とした。彼は言う「論語は道を載せた重典であり、聖書は『神の福音』を載せた天書である。論語は貴重なる書物なるも要するに人倫綱常を教める一つの道学書に過ぎぬ、然るに聖書は崇高なる道徳を教めると共に神人二界交渉の道を開いて脱罪新生の要義を示し、神国建設と云う前哲未言の大理想を掲げて人間存在の最高問題を徹底的に解決せる天地間無二の靈籙なれば仁斎の所謂『最上至極宇宙第一書』の尊称は論語よりも之を聖書に冠するを適當とせん」（論語と聖書）と。彼はまた「天に返れ、されば道明かならん、神を求めよ、されば生きん」と叫んで敬

神。愛人を基とする基督教精神教育を主張し、また「魂の奥底まで見透し給う神を欺く事は出来ない。天地の創造主なる神の現前に立つて行う教育、これが本当の教育である」（マタイ伝六ノ四の講解）と言っている。

彼はいわゆるこわい先生であった。威厳を備え、正義感強く、意志が強かったからである。しかし彼の心中には深い愛があった。本多虎雄（明治四二年普卒）は三年に転入学したが、その編入受験準備用教科書は彼が貸してくれた。また本多が奨学金受領の際、原田社長への少しの遅刻ががまんできずに去った時、その礼を欠くことを強く叱り戒めながらも貧しい彼を憐んで奨学金は貰ってやった。また本多が学費未納で卒業ストップ寸前、波多野はだまって学費を代納してやって本多を卒業させた。偶儻不羈の若者を順導した真の教育者を彼において見る事ができる。

彼は生徒一人一人のことをよく調査し、成績はもちろん、出身地、家庭、友人関係等もよく知悉していた。私たちの学年は、六、七十名であったが、教育効果を考えてこれを三組にした。また彼の部下の教務係として谷嘉吉（明三六普四二専卒）を採用の時、谷の求

める額の俸給を出したが、それは波多野のより高額であることを谷は後で知って驚いたという。彼は愛用の聖書に書いていた「上帝照臨死生何足言、尽職分勿思報酬」と。

原田社長時代に同志社は興隆し、大学も開設され、原田の外交で同志社の名は国の内外に広まったが、波多野は社長は内にあって、もっと教育を指導すべきだと信じ、原田の過度の出張を不可とし、大正六年、紀元節に勸語を代読させ、自分は九州に行こうとしたことから、両者の争は表面化して、遂に大正七年一月波多野は辞職した（学内では波多野支持者が案外に多く、全学園の問題となり、ついに大正八年一月原田も辞任した）。

## 五

波多野は辞任以来二年八ヵ月間沈黙静思したが、遂に西南学院の熱望に応じて立ち、キリスト教を教えた。高等部新設の時、その部長に推されたが固辞し、教授として哲学を講じ、礼拝の計画を立てたりした。彼は中学寮や玄南寮に入り、学生と生活を共にし、二十三年半の間その聖僧のごとき精進の日々は学生に深甚の感化を与えた（ただし休暇は京都

の家庭で過ごし、友人と旧交を温めた）。

彼はまた教師たちの研究グループのためにも尽し、リーダー格となり、独英等の原書研究、哲学研究をやった。カーライルのサータリーザータスを講じたこともあった。一平教授であったが、彼は全学園から父のごとく敬慕され、学院の精神的中心人物となった。昭和十三年三月教授を辞し講師となったが、依然として彼は学園の光であったのみならず、心境はますますさえてきたようである。同年五月二十七日（ジョン・カルビン歿後三十七四年記念日）附で彼は書いている「天地を以て家と為し日月を以て燈火と為し洗心淨軀肅然端坐静かに聖經を披きて天啓秘奥の真理を思ふ、秘奥の真理とは神と人との靈交合一の道を示せる神子の化身十字架の贖罪永遠の生命及び神国来格の真理是なり」と。昭和十九年三月七十六歳、惜まれつつ全く西南学院を辞し、恩師眠る京都若王子山下の自宅に還退した。閑居二年に満たず、昭和二十年十一月七日敗戦日本の復興を念じ、特に国民の精神的復活を祈りつつ自宅で永眠した。七十八歳であった。

（新島研究会常務委員）

主要な参考文献

村上寅次「波多野培根における儒教、プロテスタント

ズム」

森中章光 波多野筆「新島先生の人物」筆者紹介（新

島研究第九号）

波多野培根 説教講演メモ書翰稿を集めたスクラップ

ブック（）

波多野政雄編 波多野培根永眠二十年記念会にて配布

のコロタイプ版文書類

波多野培根 同志社普通学校重要記事

（大正二年九月―五年三月）

本を傷つけず合本製本できる

## 「同志社時報」合本ファイル

お申込みは

京都市上京区今出川通烏丸東入

同志社時報編集部

定価 100円〈送料 50円〉